

かねもろあるの傳受 全

特100

290



始

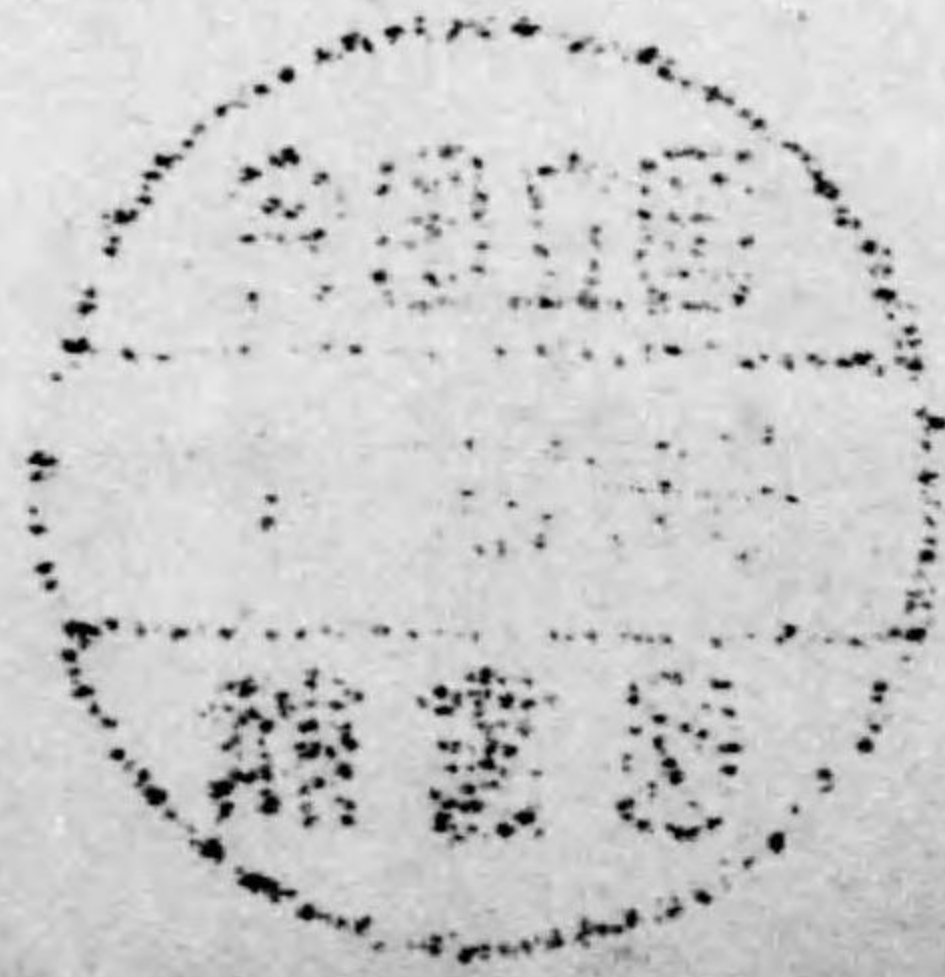


(1)

◎かねもうかるの傳受

(上の卷)

聽衆ちやうしやうの名々皆一同に平伏し先生せんせい此頃このころ御ごくろうに安樂あんらくになる御傳ごでん
 受じゆくだされ。いかばかり有難ありがたく存ぞんじ奉ほうる又今日けふより開運かいうん出世しゆつせの
 御傳受ごでんじゆ并ならに銀かねをもうくるの秘事ひじく口傳くちでんをなされくださるよし。猶
 々また以もつて有難ありがたく御冥ごめい加かめあき事ことにぞんじ奉ほうる皆々みなくおれい御禮ごらい申まうし上うます
 ○翁おきなの曰いはく安樂あんらくになる傳受でんじゆと違ちがふて出世しゆつせをする事ことや銀かねもうくる
 事ことは誰たれもかれも上皮うはべには好このむやうに見みゆれど眞實しんじつ眞底しんそには世よの



人の嫌きらふもの故ゆゑに。今日は来る人もなからふと思おもひの外ほか未明めいよ
 り仰山げうさんを群集ぐんしゆじや。よくく世間せけんに遊参ゆさん事こともないかして。いや
 な事ことにもおびたゞしき御出おいでじや。○人数にんずの中なかをすゝみ出いで。羽織はおり
 にはかまねぢらかし元けた天窓あたまを疊たぐにすりつけ私は日暮ひぐらし村むらの庄屋しやうや
 四よツ兵衛べいでござります先生せんせい様の今日けふの御傳受ごでんじゆ在方ざいほうでも町方ちやうほうでも
 何なによりかより家々いっぢに一致入用いちじちうようの事故じこ。皆みなが喜よろこびまして夜のあく
 るを待まちかねて参まりましたに。此傳受こゝは人がさらふのいやがるの
 と御意ごいなされますは。ごうした譯わけでござります他所たしよの人はぞん

じませぬが。私が村むらの者共ものどもは。かく申ます庄屋しやうやの四よツ兵衛べいを始め
 として。銀かねもうける事こと。出世しゆつせする事は。飯まいよりも好物こうぶつで。酒
 や女にと同じやうに思おもふて。眞實しんじつ眞底しんそ一人ひとりも嫌きらひはござりませぬ
 ○翁おきなの曰いはくなるほど貴様きさまのいふ通り。一人ひとりも嫌きらひはあいものじ
 やが。又またまことの好すきは猶なほないものじや好すきこそ物ものの上手じやうずになる
 で。銀かねもうけも立身たてみ出世しゆつせも誠まことの好すなら望のぞみの通りが出来るものな
 れど。さらいはかりの世よの中なかじやてに。翁おきな昔むかし遊覽いうらんのついでに
 紅毛國べんたこくへ参まりしが。此この紅毛べんたにカ子こモウカルといふ名の薬くすりを賣家うりいへ

あり又其の隣家りんかにカ子ナクナルといふ名薬めいやくあり。此のカ子モウカルといふ薬は吞のば次第ふうき又富貴ふうきの身みとなる良薬りやくなりければ世の人ひと是これをしたはぬはなし。然しかるに此薬年々にすいびして。求もとめに來る人至まて稀まれなり又其隣家またそのりんかのカ子ナクナルは。此薬このくすりを人用ひとゆれば貧窮ひんきう難儀なんぎになる事たちま忽たちまちなる毒薬どくやくにて。諸人しよじんにくみきらふといへども此薬日々はんにしやう又繁昌はんじやうし。買かにくる人門前かどもんぜんに市いちをなす。翁おきな此このの噂うわさを聞きて。あまり不審ふしんの事こともおもい。此カ子モウカルを賣うる家かに至いたりて。主あるじに問とふて曰いはく。此家このかの此薬このくすりは世よの人皆ひとみな良薬りやくなりと稱あやます。

すれど。求もとめる人ひとまれなり。又此隣家またこのりんかのカ子ナクナルは。世の人みな毒薬どくやく也なりとにくみきらふといへ共とも。求もとめる人日々に盛さかん也なり。是翁このおきなが不審ふしんなる所ところあり。委細いさい語かたり聞きせたまへ。主答こたへて曰いはく我家このかの薬くすりを良薬りやくとしりて人用もちいず隣家りんかの薬くすりを大毒薬だいどくやくと知りながら人好ひとこんで用もちゆる事こと是ことめづらしき事ことにもあらず。古語こごにも。良薬りやく口くちににがく。毒薬どくやく口くちにあましと云いへり。昔むかしも今いまも世よの人皆ひとみなおろかにして始し終ゆうよきをよきとせず。一時ひとときの己おのれがよき事ことをのみよきとする也なり。我家このかの薬くすりは用もちゆるに順したがひて。次第ふうきに富貴ふうきに至いたり。名なのごと

くにカ子モウカル事百發百中なる故に。人みな求めにきたれどもさしあたりて口に苦くて吞にくいと。毒忌養生の六ヶ敷に誰もこまりて用ぬ也。又用ひぬも無理ならず。此薬味何れも皆常人の齒ぶしにたぬ六ヶ敷薬味のみ也。一子相傳の秘方なれどあからさまに翁にかたり申すべしカ子モウカルの薬方は。儉約堪忍家業出精 正直 知足 實義この六味を大にし柔和謙遜氣量發明此の四味の加味に慈悲一片を入れて煎やうは常の通りの人の人たる道を守り。よく吞こんで腹よ治め。常に用ひて身にたり

ては万病を治す妙薬にて。いかなる火動銀虚にても。ごんな積氣借金でも。いかなる痲癩大借でもごんな氣打氣病でもいかなる疝症貧相でも。全快する事速なるに。おろかなるかな世の人皆々我を知ありとすれど。此良薬を用ひずして。罟獲陷井の中に入りて。隣家の毒薬をうれしがりて服し亡ぶるゆへんを樂しむとは。誠にかなしき事にあらずや。翁ついでに聞玉へ隣家の賣薬カ子ナクナルの薬方は美食色欲遊藝遊所奢 潜 上名聞我慢諸勝負諸相場殺生好喧嘩口論不忠不孝家内不和合諫言 嫌

氣き隨ひ身か勝が手つて不ふ實じつ情じやう吝りん嗇しよく無く慈ひ悲の奸かん佞ねい邪じや曲ま不よく敬ふけい殘ざん虐ぎやく虛きよ言げん諛てん此この廿じふ四し
 味あじを常つねに酒さけひたしにし。本ほんしやうがなさを一片ひとひら入れ。無む分別ぶんべつと
 不ふ養生じやうじやう。短たん氣き無む方ほう隋た弱じやく不ふ算さん用ようの六む味みを加か味みし。せんじやうは常
 々あさね朝あさ寢ねと。家か業げふ不ふ情せいを一ひとばいにして用もちゆるゆへ一味ひとみなめた所ところで
 も口くちあたりよく。氣きはらしおもしろく前後ぜんごをわすれて。身みも樂たの
 なやうに覺おぼゆる故ゆへ。人ひとにもすゝめて是こゝをのまし。ともによるこ
 び樂たのしみてゐるうちに。じりくくと藥やく毒どくが。節せつ季きくにしゆみ
 わたり。大たい病びやう必ひつ死し難なん澁じゆうの症せうとなり。身み体たいくだけてぐわたくと

分ぶん散さん滅めつ脚きゃくする時ときに。此こゝ藥やくの毒どくに害がいせられ。名なにちがはぬ。カ子こ
 ナクナルの毒どく功こうを知しりて。なげさくやめざらにかひなし。然しか
 りといへども。遠とほきおもんばかりする人はまれにして。唯たゞ當とう分ぶん
 の口くちにうまく。心こゝろがはれておもしろきに。多おほくは誰たれも喰くらひつく
 なり。古こ人じんの言ことばにも。遊ゆう女ぢよは則すなは利ち劍けんの如ごとし。近ちかよるものきづを
 かうむらすといふ者ものなしと。いふてあれば。まして親しやしくよる
 者ものは。命いのちや家いへもしまふなれど。其その利り劍けんはおそれず。皆みなよるこ
 んで。とかくに抱たかえ行ゆききたがる。又また聖せい賢けんは芝し蘭らんの室しつにて。入いる

ものかうはしき身みに成なるとは。誰たれも知りながら。けふたがつてよ
りつかず。是こゝにて翁おきなも知りたまへ。世よの中なかは貧乏ひんぱうと困窮こんきやうを望のぞむ
者もの多くして富貴ふうき出世しゅっせを好このむ者は至いたつてすくなくまれなれば。隣家りんか
の毒藥どくやくカ子こナクナルは。日ひにまして買人かうひと多く。我方わがたの良藥りやうやくカ子
モウカルは。日ひ々々におとろへ。賣うのれにぶきは此この譯わけなり。既もに今
翁おきなを見るに。七農工商しちのうこうせうの職しよくをなす人共見みえず。大切たいせつの父母ふぼの國
をはなれ。遠とほき爰こゝ迄までへ遊覽ゆうらんに來きりしは。是こゝ天下てんかの遊民ゆうみんにて隣家
のカ子こナクナルを好このむ人ひとにて。我方わがたの御客おきやくにあらねば。無益むぎの

人ひとなり。早さうくき歸國こくせらるべしと目めをむきだして申しけるに。翁おきな
驚おどろき過あやまちを悔くい。諸國しよこく遊覽ゆうらんを止やめて。早さうく歸國こくし身みを慎つしみ。カ子こモ
ウカルの一味いまいなりとも世よに有益うゑきの事ことを成なすべしと申しけるよ。
彼主かのあるじよろこんで曰いわく。汝なんぢも我方わがたの良藥りやうやくを一服いつぱくは吞玉のめたまへ共とも。是こゝを
以もつてよしとせず。常つねにおこたらず用もちひて。カ子こモウカルの功こう能のう
を。人ひとにも知しらして吞のま玉たまへと。懇おんごうに示しめされけるに。翁おきな頓首とんしゆ
百拜ひやくばいして。尻しりに帆ほかけて歸國こくいたした。貴様きさま方がたも皆みなカ子こモウカ
ルを吞のむ氣きにあれと。眞實しんじつ心しんをさして見みれば。此この樂味やくみは一々いっさき

らひ。きうくつでカ子ナクナルの薬方は皆々御好でおもしろからん。開運出世が實ましたくばカ子モウカルを常に用ひて。カ子ナクナルはせんじ粕でもねぶり玉ふな

○四ツ兵衛がうしろの方より。大小をさすがに武士の行義正しく翁の前は兩手をつき。拙者は守理堅固兵衛と申す者。先刻から御示しのカ子モウカルおまはせながらつなの良薬を乍不及常に用ひ立身出世致したしえかしながら拙者ごときの柔弱者にうじやくものは後にはよいとは知りながら。先づ吞にくく、苦辛のではじめのほどに難義すべし。何卒

く此薬を用ゆるに用ひ安き傳受をしたまへ

○翁の曰く足下至て篤實にて誠に出世すべき人也。彼の良薬を心安く吞よき傳受を致すべし。むかしく地獄の主焰魔大王けんぞくをあつめて曰く。此の地獄年々に衰微せし其上に。近來信州善光寺の如來が。諸國をめぐり玉ふて。めつたむえやうに安うりして。御印文をいたゞかせ玉ふ故に。此の印文を一寸でもいたゞく者は佛となりて。此の土地へはこぬ故に。此の通りの不景氣なり。此まゝに成ゆかば。朝夕けふりを釜にたてかね

劔の山も三途の川も近年には田畑となして。百性にてもせず
 ば。喰ゑまじとあげかれけるに。赤黒のまだら鬼。すゝみ出で
 申えけるは。大王少ゑもあんど玉ふな。我善光寺の寶藏にゑの
 び入り。御印文をぬすみとり。大王に差上なば。此の以後佛と
 なるもの少く。此の地へ來る者多かるべし。焰魔大王大いによ
 ろこび。此の言に順ひける。まだら鬼はふんどし引しめ。身が
 るに出立ち。善光寺の寶藏に。何んの苦もなくゑのび入り。御
 印文をうばひとり。口にくはへて忍び出で。有難しく。是さ

へあれば。わが大王の大望成就。恭なしと。両手に持て。おし
 いたゞきしが御印文の事あれば。いたゞくひやうしにこの鬼も
 すぐに佛と成りしとかや。此のはおしにて考へたまへまだら鬼
 は。夢にも佛にある氣はなれども。御印文に近よりし其徳に
 て。おもはず鬼畜の苦惱をのがれ。ついに佛果を得たる也。昔
 神農が藥艸にて。つくり玉ひし人形に。病者おもてをあはす時
 は。自然と病いゑしとかや。朱にちかよれば赤ふなる墨にまじ
 はればくろくなる。唯よき人に近よりて。またしくまれば。我

は吞のむとは思はねど。いつともなくに良薬れうやくをえんどもせず。くろ
うもあく。カチモウカルをのまされてしまふ故ゆに。立身りっしん出世しゅつせを
する者あり。又また此このうらにて。あしき人に近より。あまき友を友
とすれば。我われも知らずしにいつとなくカチナクナルの毒薬どくやくをのま
されて。身みを害がいする也。此この道理だうりを合点がてんして彼かの良薬れうやくを吞のまと
おもふ心切せんじんならば。善人ぜんにんに近よりしたしみ。よき友とものたすけを
得たもふべし。是これ良薬れうやくの吞安のみやすき傳受でんじゆでござる
○先生せんせいいつも御ごきげんよく大悦たいじつに奉存ほうぞんます

○翁おきなの曰いはく誰たれぞとおもへば。沼田ぬまた氏うぢの子息こじつ。泥作でいさく殿どのか。扱あ々々貴き
様さまハ氣きの毒どく千萬せんまん生せいれついで氣量きりやう才智さいちもありながら。我われをかしこ
しとして。人の諫いさめを聞きかず。よき人をけふたがり。あしき友ともによ
らるゝゆへ。今いまに風天ふうてん漢かんとみゆる。良禽れうきんは木きをえらんで住す。立
身しんを願ねがふ士しは。人をえらんで身みをよするとはいはざるや。顔子がんし
曾子そうしの大賢たいけんなるも。孔夫子こうふしによりたまはずんば。徳とくを全まふし給
ふ事ことあたふまじ。孔明こうめいが智ちなるも。關雲長くわんうんてうが勇ゆうなるも。照烈しょうれつ帝てい
によりて名なをなし。張良てんれう韓信かんしんが英えい才さいなるも漢かんの高祖かうそによらずん

ば。天下に功をなす事出来まじ。まして汝が輩よき人により。よき友の助けを得ずして。立身出世なるべきや。開運出世。銀まうけの秘事秘術は。よき人により善友に交るを以て始めの傳とす。又不仕合流浪困窮になる傳受は。あしき人に近より。あしき友に交り。あしきことに馴るゝを始の傳とす。汝も所詮カ子モウカルはようのます共。せめてかざなりともかいたがよいてに。扱々久しい沼州先生。今はどふした境界をしてゐらるゝぞ。泥作が曰く委細は先生御存知の。一昨年のしくぢりが。丁

と卅三度目故に。西國順禮しますると。書置して家出した。後てさつぱり本勘當。一門一家に離されし故。友達共も世話してくれず。したまひ青樓も氣うすひ相拶。女郎げい子に物いへば御きげんさまあが精一ぱい。別家手代はいふに及はず。よりつく島のあらざれば流浪するより外はなく。今さらなむともせんかたが。茄子うろにも肩はきかず。あんましようも手がいたく。米ふみせふにも足よはく。さまぐと知恵をふるい。涙よわい母方の伯母じや人をいろ／＼と。だましますかして。小判八

両くり出し。友達共を頼んだら。銀が有るなら世話せふとて。
 俄につくる親切顔。氣色わるくは思へ共。先此男の世話により
 小間物商ひ仕かけましたが。ごふやらうけもよいやうす何んで
 もかせいで一簇上んど。随分精出し居りましたが。或時友にさ
 そわれて。一ぱい呑んだ歸るさに。ふと吾妻堀へ同伴せられ連
 がするので私も。ふるい〜二百俵買ましたが。たばこ呑間に
 五十匁の利。扱々むまいと是又喰つき。小間物うつて五十匁の
 利は。十日や廿日でとる事ならず。ふしぎにもよい事にさそわ

れたるは。運のひらき口と。小間物商賣はりやつて。日々通ひ
 てあちらこちらと小すくいに。廿日たゝすに。一貫匁も取りま
 すと。飛入にはめづらしい。近年の出来物じや。手取じや追付
 幕のうちじやと。人がほめると乗が来て。なんでも關にも成る
 心。ちからは出来る。ひふはようなる。無念無相や腰車。腹や
 ぐらにぞのせて買ふ。折節相場は段々あがり。扱々上手じや名
 人じやと人がほめるに猶ちからいれ。おせば猶買ひ。上ればの
 せ。何んでも左りはさしこんだど。りきみ〜であるうちに。

西國方の便にて。風連と云ふ關取の名におふ手取の大力が。唯一おしに押すぞとて。ばた／＼と三丁安。土俵際での肩すかし。米より先へ身をなげふか。首く／＼うかと思ひしが。兎角命が物だねと。諸道具疊古足袋迄。それでもたらいで家ぬしに。そつとかくれて柱迄。ぬいてやつたでよう／＼と。あつかいの譚が立。小間物賣てゐればよい事を。よしなき事にさそわれて。夢見たやうな丸はだか。始に五十匁とらずんば。かゝるうきめにあふまじきもの。おそろしやまわり／＼て素人の。行

ぬ事じやと後悔して。懲た所が丸裸ふんどし一ツになつた所から。思ひついて上京し。まわし男となり下り。チャラクラいふて女郎の氣を取り。送りむかひにやりくり場合。狀の代筆してもやり。いろ／＼骨をおれその。祝義無心になるかすりて。羽根も出來ます。少々小銀もたまるにつけ。かうして居てもつまらぬと。おもふにつけても無念なは。去年損せし吾妻堀口へ出かけ。せめて伯母より借うけし。八兩なりとどりもござば又小間物を商ふべしと。志を極め。此度かしこに参りおけに

て今度は一生懸命の大合戦ひよつと元手を失ふたれば。實に討死乞食でござりますれば。格別のまうけはたとひようせず共損をせざるの傳受したまへ。○翁思案をして曰く。損せぬやうの傳受は。一万石は賣り。一万石は買ひ汝一人して。買と賣とをしていれば。いつでも損は行かぬてに。是奇妙なる術にあらずや。○泥作大いに笑ひて曰く。扱々先生の御素人なり。賣と買とを両方で致しままど。行がけに分と口錢に。大い損がまいります。○翁の曰く爰に一ツの眞の秘密秘傳が有て分口錢とやらの損

もなく。上ろと下ろと損もなく。わるふいても乞食にもならず片心にも苦にもならぬ妙術がある。○泥作すりより手をつきて何卒く其傳受をこそ教へたまへ。○翁の曰く此傳受至て六ヶ敷傳受なり。耳をさらへてよく聞れよ。其秘傳といふは。唯々相場をせぬ事なり。是さるせねば高下しても損もゆかず。分と口錢は猶いらす。乞食する事猶もつてなく心づかいもいらす。大安心の妙術ならずや。汝是を守りたまへ。○泥作腹を立て曰く相場にあらねば急に銀はまうかりま

せぬ。翁の曰く相場にあらずんば。急に乞食にありもせまい。○泥作の曰く乞食になることばかり案じた物でもござるまい。○翁の曰く銀がまうかるとばかり決した事でもござるまい。○それが決してまうかる事なれば。損する者は一人もあるまい。○損するものが一人もなくば。汝行共まうかる事は猶あるまじ。○それは格別今爰に一人の乞食あらんに。其乞食をすくひ引上げて今の汝がごとき身分にいたし遣はしなば。其の乞食は不足におもいて本の乞食がましじやといわんか。○泥作が曰く其乞食なんぞ不足

に思はん。長者にもなりし心で嘸よろこばん。○翁の曰く然れば汝も今の身分をよろこびて乞食になるの危き事を恐れて止よむかし一疋の大蛙ありけるが。生れつき剛性にして。蛇も是におそるゝ程の勢ひありし。余りに身分に過たる望を起し。我人間にもおとるまし。今よりは人間と同様に身をなまて。歩まんとて。両手をあげてしやんと立ち。人の如くに歩み行しが。常とちがいて眼上にひきて。肝心のむかふが見へず。行先がわからぬ故。岩にあたりて身をやぶり。死にうせ亡びにけるとあん。

汝よかざらず。皆世の人。此蛙の道理にて。己が望む事。欲が
 あれば。忽ちむかふがわからず。見へずして。多く身を亡すな
 り。汝も只欲のみにうへに目がつき。損の行と肝心の。むかふ
 が見へずわからぬは。乞食とある事目前なり。今危きをいとは
 ず。一商せんといふは。以前の損が残念無念と。おもふが
 故ならずや。又此後も其の通りにて。万一乞食となりて見よ。
 今の身分が何はどかく。残念ならん。下地損を損せまいとて。
 今改めて。乞食となるが徳か。下地の損は損で見切て乞食非人

とあらぬが徳か。汝がなす事望む事。カ子ナクナルの皆薬味と
 は知らざるか。世俗の言にも。後の百より今の五十。見ぬ銀
 より見ぬた錢といふ如く。汝も見ぬ危き大銀を得んと思ふよ
 り。たとひ壹錢五錢づゝにても。毎日く丈夫に見ぬた銀まう
 けこそ。銀まうけなり。桐の木は早くのびれと大木なし。楠
 は一寸二寸のびる事も至てかたしといへ共。皆大木にならざる
 はなし。翁が知音に異名をば百匁といわるゝ老人あり。此男一
 代に。世に勝れたる豪家となれり。此男若き時より願心をたて

年分に只銀子百匁づゝ。のばし度とてかせがれけるに。此息子が曰く何とて父は年分に。纒の銀を得んところ願ひたもふものなり。すべて望は大きく願ひても。其の十分の一よりも出来ぬ物なれば。年分に五百匁ものばす氣で。かせぐころよかるべしと申けるに。親父眼むぎ出して曰く。汝が願心大いにちがゑり年分に五百匁まうけんと思へば。心が早や五百匁はまうける氣になりて。錢づかいもあらく。諸事に心が大きくなりて。儉約を用ゆる心自然とすくなく。一代の費仰山にして。富貴に至る

事なし。又我が願心の如く。年分に唯百匁の銀がどうぞく延したしと思ふてかせぐ時は。心も自然と是に應じてつゝまやかにて。年分にまうける高が百目なりと思へば。壹錢貳錢も無益又はよふつかわす。おのづから儉約質素を守る故。生涯のついでなき事大いにして。是富に至るの妙術なり。又人が大銀をもふけたをみても。我は年分百目さへ得れば。よいと思ふてうらやまぬ故。はすはな事や危き事をせぬ故に。損をするといふ目なし。泰山もとより高からず。微塵つもりてようやく高し。

汝も是を心得て。厘毛をつみかさぬれば。泰山の如き身体と成るとしるべし。すべて世の中を見るに。過急に大金をまうけたり。又至て口錢多き商賣に。大家に成るはまれなる物にて。厘毛をあらそふまうけにくきを心勞してまうけた者が。終に大家に成る者ぞかし。我れ年分に。唯だ百目の銀をためたといへばおかしきに似て。百目の銀はわづかなれど。年分かせいで。唯百目よりもまうからぬと思へば金銀が大切に無益の事には。半錢も費さず萬事にゆだんが出ぬ故に。銀の望わづかなれど。

万事に油斷せぬ心が。數万貫目の富をなすなりと。示されけるぞ尤なり。此男かゝる心得なりし故に。我一代に世にかくれなき長者とは成しなり。故に此老人を百目くんと近所にて異名申尊とむなり。此親父こそ今朝から。御咄し申良藥のカ子モウカルをよく呑んだ人に見へたり貴様も當時大分行なはるゝ吐方を用ひて澤山に呑んで置きたカ子ナクナルの藥毒を一先吐ひて去まわ去やれ。又其上で療治があらう。泥作大いに感心して日段々の御深切にて實に先非をくやみました。此上出世の傳授し給へ

○翁大いに呵て曰。汝出世の術をのみ問ふて。父母に事ふの道をきかず此不孝心あるうちは。予出世する傳授するとも天道にくみてなんぞ汝をよからえめん無益の事なり早く歸れ○泥作實にあやまりて曰先生何ぞぞ我をあはれみ孝心になる傳授し給へ

○翁の曰孝行えたきが實心ならば彼良薬のカ子モウカルを今より早速用ひ給へ親に孝行する傳授が。立身出世する薬よて。翁が方は一薬にて。別に二方は用ひませぬ

○先生様德行や義兵衛でござります。此忤忠吉當年十二才に成

おりますで。本家の方へ。丁稚に遣しますにつけ。連れて上りました。何とぞく首尾よう勤め。出世致しますの御傳受を願ひ上ます○翁の曰貴様の實體が似たか。ずんと人相もよし。おどかしう見へる。首尾よくつとめ。忠孝を全ふし出世する傳受を。子供の心得よきやうに。口づさみにして書てやる。是をよくく覺へて。此通りを守らふぞや

「樂書や犬かみあはせ溝あぶり物をおとすなものをとられか
「つかふごにものをばいふなおとなしく下女といさかい中わ

るふすな

「御主人の内ごしゅじんうちの事ことをば外ほかへ出でてよしあしともにいふをかたるな

「傍輩ほうはいは中なかむつまじく我われよりも下したなる者ものをあわれみてやれ

「ひまあらば在所ざいしょの父母ふぼへ状じょうやりて無事ぶじでつとむる事ことを知らせよ

「敷入やぶいりに行ゆかば泊とまらずかへれたゞ永居ながめはせぬが忠義ちうぎとぞ知しれ我われひとり勤つとめ働はたらけ傍輩ほうはいのあちらこちらとゆづりあわずに

「食事しょくじをばする度たびごと毎ごとにあぢあふてみよや主人しゅじんのみな御恩ごおんなり

「灸まゆするよ食しょくを過とさす達者たつしゃなが主人しゅじんへ忠義親ちうぎおやへ孝行こうぎょう

「はきそうち禮義れいぎ配膳何事はいぜんなんにこともえたらくにせずきよくととのへ

「利口りこうぶり言葉多ことばおほと片意地かたいちと短氣たんき不律氣ふりつぎうそつぐもすな

「用事ようじをばかいて芝居しばいを見るのみか戻もどつて間似まにあふ合あうりをいふなよ

「正直しやうぢきと柔和にやうわにすれば御主人ごしゅじんも傍輩ほうはい中ちゆうもかわいがるなり

「商賣しょうばいをよく覺おぼへるが銀かねよりも宿やどへ這入はいるの大元手おほもとてあり

「出世をばせんと思はゞ身をつめてよきことにのみ心うつせよ」

「手代にはよくまりふと内證の使はかた／＼ことわりをいへ

「何事を誰が頼もど御主人にかくま事ならかたくいたすな

「奉公を大事とするが何よりもかより親へ孝行と知れ

「開運や出世の傳受や銀まうけ外にはあらぬ忠義孝行

「正根をば入るゝがうへに正根をば入れて覺へよ家業職分

「おさなくも物の道理をよくまりて無理と無理屈いわぬもの

なり

此うたを進せるほごに得と合点して是を吞込さへすれば忠孝も

全く其身も立身出世の傳受じや義兵衛殿くれ／＼是をおしへめ

され

かねもうかるの傳受上の巻終

◎かねもうかるの傳受

(下の巻)

○私は鍛冶屋の仁藏と申まして。たゞさ止ば喰やひ職人故にい
ろくどかせぎまして。小家を一軒買ました所が其翌年の春京
大火に類焼にあい。がつくり力が落る所を取直し。晝夜わかた
ずかせぎましたで。漸と三四年か、つて。銀の三貫匁も出来ま
した所が。妻が里が大不方と。私が弟が難儀に。無據壹貫五六
百目出してつかはし。手もがれた様に心細く存知まする又々

去年の秋妻が大病に何やかやと。七八百目入りまして。私も死に
入るやうに思ふてゐる矢先に二才の倅をそゝのかして。二人し
てさつぱりぽんと皆に去をりましたで。私も夫から起つた此氣
病。唯ぶらく日を送りますで。晝夜喰こむのみにして。活た心
もござりませぬ。今朝より先生の御傳受をうけ給はりますれば。○
身を勤め職分をかせぎさへすりや。出世は出来るとのたまへ共。
私杯は無如在もかせぎましたれど。不運になつて来ては何もか
もかなわぬものでござります。○翁の曰職分を精出して不運に

成てはかなわぬといわるゝが。それはきついで管違ひじや。運はかせぐなり。かせぐがすぐ運なり。汝もすでにかせぎし時は家を一軒求めしにわらずや。其後類火にあひし後も。またやつきとなりてかせいだりやこそ。三貫匁も殖たじやないか其後はいろくの難事。銀がへるゝ氣をやんで。かせぐ事にぶし。かせぎがにぶいから。運のめぐりもわるふなつて。家内がかせぎにあきめひまがあるから息子手代もあしくなるなり。主が無念無向にかせぐ時には。諸事あしき事はない。物なり。

運とかせぐと一つの物なれば。是より又々無念無向にかせいで見られよ。運がめぐつて病氣もよをなる。家内の工面もよろなり何もかもよふなるものじや。翁かいふに順ひて。今より改めかせぐがよいぞ。仁藏が曰。御仰せ有難ふ存ますれど。私も實にかせぐ心が出ませぬ。翁の曰。ごをすれば又かせぐ心がでるぞ。仁藏が曰。私も卅兩と五十兩は不斷手にあつた職人が今壹文をしでは一向に心が細くて働かせぬ。今にも三十兩と廿兩の銀がある。此銀はとんこない氣でかくしおき。どのやふ事があ

つてもつかわす。とんとない物にして。おきましても。是があらど何となしに心が丈夫で働けますれど。何んよもあしでは。何となふ心細く。とんとかせぐ心がでませぬ。○翁の曰是は随分尤なり。すべて世間をみるに。同じ人間なれど銀があれば自然と威あり。貧をすれば肩身をばる。人の心はおかしき物なり。汝も銀がなくて心細くて職分をかせぐ心が出ずば。翁が銀を遣すべし。乍去今も汝がいわるゝ通りに。壹錢も決して遣ふ事はならぬなりとて。筆をとりて巻紙に金子百兩と書。汝に是を壹

錢もつかはず。のけ置て心を丈夫にするの事ならば是を金箱に入置て我は金ありと思ひてかせぐべし。むかし堺に夫婦住のまづしき商人有けるが。夫婦共古今まれなる職分にかせぎける故に廿年ばかりの間に。大商人となり富榮へ手代も多く仕ひける。然るに此妻何方へ行とて。元まづしき時の衣類にて。風儀をかへず質素なりけるゆへに。ある時夫の申けるは。汝昔も今も質素にして同じ風儀毎々感心なり。然りといへど今はむかしとは身体も違ふ事なり。殊に女の衣服を楽しみとする物なれば。

何にても望の品は拵へ申さるべしといふ。妻答て曰。乍恐。大子
 將軍より。名々の身分の位をみれば。つれを着ても身に過候へ
 共。女のくせにて人のよき衣服を見れば。はしきが病にて候ま。○
 私も見ろほどのよき物は早速拵置候得共。着まする事は冥加を
 存て着ませぬなりと申さるゝに。○夫あされてさやうにいつの間
 に拵られしと申ければ。○妻の曰。今朝も門を通る女中の衣類を
 見て。うらやましく候ま。○早速に先刻も二ツ三ツ拵る候へ共。
 いづれの衣類も着ることは我分を思ひ恐れて一ツも着はいたさ

じ。拵へし衣類を御覽くださるべしとて簞笥の引出しあけられ
 ければ。緋ごんす。緋ざや。天鷲織。其外さまの呉服衣裳
 が皆々片付にて拵へありし故。夫も甘心感儀して。妻が徳を賞
 せしとかや。是等誠に足る事を知り。儉約を守り身のほご知り
 し人にて。實に長者大豪共女ながらもなる人は格別なり。汝
 む此吉例にあづかりて。我書付を元手として。こゝろを丈夫に
 し。今よりはげんでかせぐべし。○仁藏の曰。さて。御厚情の段
 ありかたく。翁に實の金子をもらいなば。無據ば又遣ふ心も

出べきが。此御書付は實に實に誠の元手にて。ごうまても實に遣へずかせぐのみ元手とは眞の福をはや得たりと悦けるに。翁の曰かせぐが運なり運はかせぐなりといふに違なしと。汝早かせぐ心に成たで早人相に全快の血色と福分があらわれた。

「かせぐから生出す息子四人なり富と上運福と仕合

○先生には始て得貴意候へ共。名を申上候へば定て御存知成べし。拙者事は此比世上で。今業平く〜と婦人こそつて悦びまする。花洛清水邊の住人橋井助之亟と申者。以後御見知り給はる

べし。拙者義はいかなる過古の因縁にや。兎角女性が予にめでまして。往來をする道すがらも。我は誰とはえら雪の白粉義眉山月のいとあまめける上郎が。我もわれもと予おそばによるかと思へばトツチン〜。北山時雨と同じ事にて。ぬれか〜つてごもあらず。花見る頃の夕ぐれには。幕の内より美なる婦に袖もて袖をひかれたといふやうな。生れ付あれば。よけれ共せわしき父母が急作にて。あこ爰肉が行わたらず。凸凹多い面体にて。雅人の好むチャリ首故。文盲野人の女童の目さ〜には。お

よびがたきかんばせ故に。辻君も袖をひきせぬ。されども拙者
 戀知りて。おそろく女性の好物は百年に一とせたゝぬ九十九髪
 の婆さまでも。ござれば無興にも歸しませぬ。誰でもかれでも。
 相手きらわぬ助之丞といふ所で。今業平くど。おだてますか
 は知らね共。かりにも拙者業平なりひらと。世間でいはるゝ身
 ましあれば。千代萬代の末迄も。戀知じやなさけまじやと誰
 かれなしに惚られたいが拙者が大願いにしへより色事仕共多け
 れど。拙者壹人立身出世飛ぬけて。誰かれなしに末代迄。惚れ

られる秘密傳受をおしへ給へ。翁腹すじよりて曰傳受があるど
 もく。誰彼なしに惚られたくば。随分く澤山に金銀をやつ
 たがよい。金銀を大様にやりさへすれば誰でも彼でもほれる物
 じや。○助之丞顔玄かめて曰金銀をやつてほれるのは。是金銀に
 惚るのにして。拙者にほれるといふものあらず。拙者が望は金
 銀なふして。而後に男もよからず。男あしうして而後に人我
 に惚れる事を得るの。秘密傳をねがふなり。○翁の曰金銀なく。男
 もかまわす。また其上に末世末代の人々にまで。惚られる傳受

なきにもあらず。其証據には。天竺の釋迦如來青錢のたくわへ
 めなく。樹下石上の身の垢だらけ。苔を生せしからだなれど。
 大千世界の貴人高家いやしき賤のば、嗚迄も。身命をなげうつ
 て。ほれてく、惚ぬいて。今の世までも戀したわざる者はなし。
 又唐の孔夫子は。御一代浪々の御身よて。多くの金銀を蒔ち
 らし給ふ噂もきかず。元來美男のはまれもあらねど。君子善者は
 いふに及ばず小人女子も皆したいほれざるもは一人もなし。
 此釋迦孔子を始とし。其外聖賢忠臣孝子。佛家祖師方徳者には。

惚れて身を抛ち。したわぬものは一人もなし。古しへの在五中
 將業平や。光源氏の君がなんば程よい男じやとて。今の世の娘
 や後家やば、嗚が。有難がつて涙ながしてまたひもせず。佐渡
 の金山に銀が澤山にあるとて。誰が一人金山にほれて。私は一
 向に金山と。世帯がしたいといふた者もない。爰を思へば人は
 唯。金銀にも。美目のよしあしにも。よらぬ物じや。岩永左衛
 門や。斧九太夫は。故人になつた男一番の眠獅が仕ても。にく
 てらしいと誰でも憎み。畠山の重忠や。大星由良之助は。男のよ

しない市川市紅が藝をしても。情ぶかい善人じやと。男女ども
 にしたふにあらずや。是にて貴様も合点して。兎角人に惚られ
 たくば。埒もない色事せんさく取おいて。賢を賢とし色にかへ
 て。道をまなび行けもせぬ男をみがきあらをより日々にあらた
 に心をみがき徳をつむべし徳さへあれば金銀入らず。不男でも
 天下の人が仁に歸ししたぬものは一人もなし。是を名づけて
 人間の誠の開運出世といふなり。○助之丞かぶりふつて曰扱々先
 生は御呑込よからぬなり。拙者が望はかたくろしい。徳を以て

惚らる、望まあらず。唯やわらかな戀を以て。戀知りじや情し
 りじやと。世の人に戀したぬれたき望に候。かく申せば少しい
 やみに候へ共實よくからぬ。願でござりませ。○翁威儀を正して
 曰汝よくきけ。戀は愛なり愛の至極は。則仁なり仁は。則心
 徳なれば。徳と戀とは一つなれど。をろかなるかな汝にかざら
 ず。すべて世の人戀といへば。色欲の事なりと混雜して居るこ
 そ間違也。戀と色欲とは雲泥の違ひにして。同日の論にあらず。
 そもく戀といふ事は。汝どきの。アンポラポンのしる事にあ

らず古歌にも

「戀せずば人は心のあからましものゝあはれも是よりぞしる
 此和歌の如く戀は愛也情也。愛情則仁也。人の實情なり。戀
 の心ある人は。よく親を愛しいつくしみ。よく身を愛し善に導
 き。よく君を愛し大切にし。臣を愛して義をおしへ。兄を愛し
 て敬ひ。弟を愛していたはり。夫を愛し其身をまかせ。妻を愛
 して貞をらしむ。友を愛して信をつくす飢ては食を愛し。渴し
 て水をしたふ。是天理自然の實情にして。實情の外餘念なきを

戀といふ故に。戀の心のある人は。あはれみふかく。かりにも
 人をそこなわす。業平朝臣の百年のうばがまよふをふびんに思
 ひ給ひて。枕をかはしばんのふ執着をたゝせたまふは。大慈大
 悲の御心にて。戀の戀たる實情なり。又汝等が戀なりと覺へて
 ゐるて大方が色欲なり。色欲は是不仁不義にて世の惡事也。災
 也。戀は仁にて世の寶なり助也。戀と色欲と其差別六ヶ敷事に
 て。中々翁あごが知る事ならねど。前方我師にきける事あり。
 今汝がためにかたるあり心を治めてよくきかれよ。むかし後醍

醍帝たいてい吉野よしのに御座ござあらせ給たまふ時分じぶんに仕つかへ奉たてまつる。辨べんの内侍ないしと申まをは。世よにまれある容顔ようがん美麗びれいのかくれなかりしかば尊氏たがうしの臣しんなりける。
 高たかの武藏守むさしのかみ師直しりちゆうはかねて色欲しきよく第一だいいちの非道ひだうの者ものなりけるが。此内このない侍しをしたひ執着しつちやくしていつはりの計はかりごとを用もちひ。あまたの家來けらいを遣つかはし辨べんの内侍ないしをあざむきすかして乗物のりものにうつし參まいらせうばいと
 り。道みちを急いそぎて歸かへりける折ひりふし楠くすのき正行まさつら神詣かみまきつらの道筋みちすじまで。此乘こののり物ものを見みかけけるが。知勇兼備ちゆうけんびの正行まさつらあれば何なにかへあやしき事ことも思おもひすぐすにかけより。師直しりちゆうが家來けらいを一いち々く追拂おいはらひ。乗物のりものを取戻とりもど

し戸とをひらきみれば。辨べんの内侍ないしは雨あめにたゞよふ花はなの如ごとく。なげ
 きにまづみ給たまふ姿すがたいとあはれにもたをやかあり。御様子おんようす尋ね參まい
 らせば。まかづの仕合しあわせを告給つげたまふに。正行まさつらおどろき。早速そそく供奉くわんぷ
 し。帝みかどへおくり參まいらしければ。帝御感みかごかんあゝめあらず忠臣ちゆうしん今いまに始はじめ
 め事ことながら此度このたびの恩賞おんしょうに。辨べんの内侍ないしを汝なんじが宿やどの花はなと詠あかめよと。
 正行まさつらへ下くだし給たまはるの旨むねなりけるに正行まさつら恐入おそいれいて。御辞退ごじたいを達たつて而せ申まを
 上あげ奉たてまつりける。希みかども御不審おしんに御思召おぼしめし正行まさつらにのたまひけるは美ひ
 女じよは世よの人ひと毎ごとに好このむ處ところなり。然しかるに汝なんじ達たつて辭退じたい申まをは辨べんの内侍ないしは

汝が心に染すやと御命ありけるに。正行もつたぬなしと有難涙
にかひくれながら。一首の和歌を詠じて奉りける。其うたに
「とても世になからふべきもあらぬ身は

かりの契りをいかで結ばん

此歌を御覧聞有ければ。帝を始め月卿雲客一同に。扱もく正
行は。世にあさけある武士にて。古今まれなる戀知りかあと御
感涙に。袖をうるほし給ひけるとなん聞侍る。翁が愚盲な心に
も。此歌を思ひ出す度毎には。ゆうにやさしく。又あはれかあ

しくて感涙致さぬ事はなし。誠にく正行は世にありがたき忠
臣にて。なさけ有てよく戀の心に通せし人なり。今の歌は。正
行かねて父正成が忠臣をうけつぎ。帝へ我身命を奉りて。今
日にも明日にも。君のために討死すべき身なれば我命はなきも
のにて。とても世になからふべくもあらぬ身なれば。今美人た
る内侍を得て。契りたりとも。全きちぎりにはあらで。誠に假
の契りにて。今にも我討死せば。いとをしや世にならびなき。
辨の内侍もどもにあだ花と。散給ふは必定なれば。かゝる情な

く。つらき憂目をみする事は。御不便の至りにて。内侍一代の
 身をそこなふ事。あげかは敷。いとをしき御事なれば。我は得
 すまじ。眞實内侍をいとおしく。愛し侍る心あまりて。御辭退
 申せしとなり。是誠の情仁心にて。戀といふはこの事なり。是
 にてとくと合点し給へ。正行が世に美人たりし内侍を。達て辭
 退せられしは。内侍の御身をいとおしく。大切に思ふあまりに
 て。愛するの至極にして戀なり。又武藏守師直が。内侍をまた
 ひしは。己が樂みとせんがための私欲にて。人のなげきも。難

義もかへり見ぬ。大惡無道の世に情なき心にて。是が則色欲
 なり。師直はかゝる色欲剛惡の非道者故。身をほろばし今の代
 迄汚名高く。唾吐して人惡むなり。正行はかゝる戀知りなりけ
 る故に。君には則忠をつくし。父母には則孝をつくし民に
 は惠みあつく。内侍には誠のなさけ戀となる武門の龜鑑明らか
 に千萬歳の末々迄も。またはす惚ぬ物はなし。是何故ぞ。皆人
 徳のなす所なり。人は元來性善なれば。無學の女子や童でも。
 徳ある人は天然またひ何ほごみめや容がよふても。心のあしき

はきらふなり。誰にても。うは氣陽氣には美目すぐれしを好めども。眞實心を尋ぬれば。美目より心を去たふ物なり。或所に放蕩なる富家の息子ありしが。又其近所に美目よき女房五人ありける。此息子常に女房等が方へ心易くあそび行て或時はさまざまのたわれこと抔申し。よしなき言も折々に及びけれど。此息子其所一番の富家の者なれば。此女も四人共是にへつらい。ともにたはむれて。彼が心にさかはぬやうに。あしらいける故に。息子もよろこび。こゝろよき女房達なりとて。常に人にも

かたりてほめける。然るに北隣家の女房一人は。此息子があそび咄しに来るをいとひ。少しもへつらはず。行儀をよくし。折々息子がたはれ言を申時は。すぐに耻をあたへし事度々ありければ。息子常に立腹し。此女をあだ敵のごとくにくみて。人にもあしさまにそしりける。其後いかなる事にてやりけん。此五人の女房が夫皆々世を去りて五人ともに若き寡女となりける。此時或友彼息子に申けるは。汝常に彼五人の女にたはれなご申て。執心しける様子なり。今彼等何れもやもめ女となりし事な

れば。我汝がために媒すべし。心になひしを迎へ取りて。女房とせよと申けるに。息子大によろこびて曰。何卒く北隣家の女をば仲人してたまわれといふ。或友顔を志かめて曰。彼女は汝常にあだ敵の如くにくみそしられしあり。そのみならず。美目容も外四人の女とは余ほどおそれり。然るに汝彼女をむかへたしといふ心はいかなる事ぞ。息子曰されは其事に候なり。我是迄上氣を以てたはむれし時。かれが我にへつらはす。あさけなくつらくあたりて。我を耻しめしは心よからず。にくかり

けれど。これ皆女のみさはの守り。けんごなる所あり。又我を用捨なく耻しむるは。みお女の正しき守りにて。其夫への貞心なれば容儀は十分ならずとも心の清浄故人にをとらぬ所有ば。家を治め子孫をおしゆる女房には。いたしたくこそ願ふなり。また残り四人の女は美目は彼よりうつくしけれど。大切の家を治る女房には不安心にて。よくくおもへば。取にたらざるいたづらものなりとかたりけるに。此朋友も感じけるとかや。此咄しの通りにて。うは氣には美目やかたちによよひもせふが。

まはりくた所では。本体の命やますして。心のよいを誰でも
 えたふ。此心のよきをえたふ心が。まぐに自然の實情にて。是
 又戀なり。今はむかしと成けるが。武藏の國の名ある武士。夫
 婦むつまじく暮しけるに。此某上京の節遊女になじみける
 か。かたらひ淺からぬまゝ。ついに身うけし。つれ歸りて妾と
 なしけるが此妾はらあしき者にてさまゝと本妻をあしく申あ
 しけるに。某も妾が奸曲に迷ひ。或日妻をさんぐにのゝゑ
 りいかりて。終に家を追出しけるに。妻はなく。夫が家を出

で。門前に至り。いと残りおしげに。あゆみ行らしるすがた。
 世にあわれに見えければ。某後より言をかけて。汝身ひとつ出
 行や。なにとて汝がもろくの調度をも。持て歸らざるやと申
 ければ妻見かへりて涙をうかめ。わらはが身にては。世に大切
 のうへもなき。主さへも残し歸る身にて。何とて余の物をとり
 て。歸るの心あらんやと。なげきける實情某が肝に通りにて
 感涙し。忽妻をよび留て。あやまちをくやみ。彼妾を追えりぞ
 け。借老のちぎりふかゝりければ。家ますく榮しとかや。此

某それがしが妾しやうに迷まよひしは色欲しきよくなり。又また妻つまが出行いでゆくうしろかげを世よにあはれにおもひしは。惻隱そくいんの心こころにて。是これすなはち戀こいなり。また妻つまが實情じつじやう貞心ていしんに感じかんじ。我非わがひを悔くやみしも。皆々みな羞惡しゆうおそくいんの心こころにて戀こいの戀こいたる人情にんじやうなり。戀こいの心こころのある人ひとは。よく又また人の情じやうをまる故ゆゑに人ひとにも又またよく愛あいせらるゝあり

「身みをつみて人ひとのいたさぞ知しられけり

戀こいしかりせは戀こいしがるらん

此この和歌わかは貞婦ていふ貞子ていこが歌うたにして。我夫わがきつとの上のぼがたへ登のぼりたまいて。

留主るすなりしに。五月雨さみだれふかくさびしき日ひ。いと心細こころほそくおもひしあまりに。夫きつとが妾しやうなるものも。我われと同じく夫きつとの留主るすにて。嘸さうき事ことにさびしかりつらんと。酒さけやうのものねんごろにとゝのゑる。此歌このうたをよみて送おくりけるに。妾めかけも貞女ていこが情なさけふかく。少ちしもまつとあき貞心ていしんを感じかんじえたひて。ますく大切たいせつに敬うやまひつかへけるとなん。此歌このうた貞子ていこが實情じつじやう。戀こいのきつすいまじりなしにて。世界せかいの女をんなの鑑かたと成なて今いまにしたはぬ者ものもなし。是等これらの道理道理をよく台点だてんし。汝なんじも人ひとにほれられたくば。誠まことの戀こいの修行しゆぎやうすべし。戀こいを色欲しきよくの差しや

別べつをせずして。かりにも色欲しきよくにおぼるゝ事ことをおそるべし。世よに色欲しきよくほど。身みをほろばし人ひとをそこない。富貴ふうきをやぶり。貧窮ひんきやうにいたり。徳とくを損そんじ。名なをけがし。災わざわいをまねき。子孫しそんをうしなふ根本こんぽんにてカチナクナルの毒樂どくやくの。功能書こうのうがきの第一番だいいちばんの書出かきだしにあ
るあれば。くれぐれ汝慎なんじつしみておそるゝが上うへにも猶なほおそるべし
○助之丞すけのじやう感心かんしんして曰いわく淺あさからぬ御示おんしめしにて。我わが望のぞみの人ひとに惚ほれられ
る傳授でんじゆは急度きつど承知しやうちいたしたが。又また我われから人ひとにはれるの心得こころえ傳授
は。いかゞでござりませす○翁おきなの曰いわく前まへにも段々だんく申通まうすり。戀こひは愛あいな

り。愛あいの至極しごくは。親おやを愛あいするより大おほいなる事ことはなければ。人ひとに
惚ほれるの心得こころえ傳授でんじゆは。唯々ただわきへ心こころを多おほくうつさず。我わが父母ふぼに
親切ひんせつとほれて。いつくしみ愛あいしゑたひて敬うやまは。一ひと孝立こうたちて万善ばんぜん
の長者ちやうじやとなりて。子孫しそん長久ちやうきう繁榮はんえいなり。是これがすぐにカチモウカル
の功能こうのうにて。開運出世かいうんしゆつせの傳授でんじゆなれば。夢ゆめにも孝行こうかう怠おこたるな

かねもうかるの傳受下の巻終

大正三年十月十日印刷
大正三年十月十五日發行

定價金拾五錢

不許

復製



著作兼發行人

工

藤

襄

印刷人

塚

田

太

門

印刷所

塚

田

尙

榮

堂

全所

大阪市西區北堀江通二丁目九番地

大阪市南區二ツ井戸町乙三番

大阪市南區二ツ井戸町乙三番

發行所

岳

文

堂

274
1072

終

